

2010年春学期レポート

2010年の春学期から本格的に「ろう者学」学部を専攻することになり、その為の一般教養とその学部に関する必須科目、また選択科目を履修することになった。クラスの内容は次の通りである。1) GSR103 American Sign Language and Deaf Studies 2) GSR104 Quantitative Reasoning Approach 3) DST 495 Special topics (Deaf Nation in Developing countries) 4) LIN 263 Introduction to the structure of American Sign Language

1) GSR103 American Sign Language and Deaf Studies

このクラスは一般教養科目の中でも必須である。そのクラスの目的は、アメリカ手話とろう者学の基礎知識を身につけるためである。ギャロデット大学は、世界の唯一ろう・難聴のための大学であるのにも関わらず、数年前まで一般教養として正式に認められたのアメリカ手話とろう者学のクラスがなかったそうだ。このクラスは、ギャロデット大学に入るろう・難聴者がろう社会について分析し、基礎知識を身につけそこからアンディティを確立させるという目的もある。クラスでは、アメリカ手話の言語としての知識、今と昔の手話の違いについて学んだ。このアメリカ手話言語学は、2009年秋学期に履修した言語学入門と似た内容だったので、復習としては丁度良い内容であった。それだけでなく昔の手話と今の手話の違い、地方による手話の違いを比較した。日本と同じように地域による手話の表現がそれぞれ違っていることがわかる。その他に「Audism」を見る機会があった。「Audism」とは、聞こえない理由で疎外されたり差別されたりする意味あいを持つ。例えば家庭でも、聴者の両親を持つろう者はディナーの時に、会話についていけず両親に聞いても後回しされてしまう。または、説明してもらっても具体的な内容を教えてくれないため、疎外感を感じることもある。他の例では、メインストリームの子どもの経験があった。手話通訳がろう生徒が答えを間違っていると勝手に思い込み、勝手に答えを言い直すが、結局は間違いだった。その後、ろう者生徒がそのことを知り、生徒の言葉を通訳するだけなのになぜこんなことをするのかと問い

ただすというような、手話通訳にはあるまじき信頼関係の損傷などもある。そのような問題に関してクラスメートの経験話も聞いたりした。このクラスを受講して思ったことは、ろう学校や大学にもろう・難聴者のためにろう者学入門クラスを設けることが大切ではないかと思う。ろう者・難聴者の一部では、いまだにろう社会に馴染めない理由の一つとして、ろう者学と手話に対する知識がまだ浸透していない為ではないだろうかとおもう。またろう学校側でもろう学校だけでなく、メインストリームのクラスに通っているろう・難聴生徒もいること、その理由を知ることも大切ではないだろうか。そうしなければろう社会は、それぞれのグループに固まってしまい、統一感、または連帯感というようなものを失ってしまうという不安がある。

2) GSR104 Quantitative Reasoning Approach

GSR103と同じように一般教養の必須科目として履修した。

Quantitative Reasoning Approach とは、一言で言って数学である。そのクラスの目的は倫理学、問題解決するためのスキル、科学、テクノロジーの文脈の判断力を高めるために統計学、確率、幾何学を中心に学ぶ。数学が苦手な私にとって、このクラスは大変だったのだが、先生が分かりやすいように、授業を進めていたのが幸運だった。クラスは数学だけでなく、他の学部で統計を使う際に役に立つので参考になる。学期末テストは、他のクラスの同様にプレゼンテーションをしようと思ったのだが、そうではなく、先生から出された課題を統計とパラグラフに変えて、その結果と理由を「Echo360」というプログラムを使ってレポートと共に提出をした。「Echo360」とは、普段使っているパソコンからの撮影とは違い、パワーポイントと一緒に使えるもので場所のイメージでいえばテレビ局のようなものである。撮影中にパワーポイントを背景（もしくは撮影される人の右側）に表示される。終了後に自動的にパワーポイントとクラス

内の手話説明内容を同時に見ることができるというプログラムである。

3) DST 493 Special Topics (Deaf Nation in Developing Countries)

このクラスは、ろう者学学科の選択科目の一つであり、発展途上国のろう社会に興味を持っていることから、このクラスを取ることにした。先生は南アフリカ出身でギャロデット大学を入学するために米国に移った。卒業後、ろう社会で様々なポジションで働き、それからろう者学学部で教鞭を取るようになった。このクラスを取り入れた理由は、発展途上国でのインターンシップで文化摩擦など問題が度々起きることが多いために、基礎知識、他の国の文化や言語、背景を理解する目的で取り入れたクラスである。クラスメートは、外国に興味を持っている人が多いので、他のクラスと比べて議論しやすい雰囲気であった。外国にいった事がない人の経験によってそれぞれの意見を聞くことができた。さらに米国内では人種差別がまだ残っているのもあって、クラス内は殆ど人種差別について話し合うことも多い。特に白人と黒人についての議論が多く、アジア系やラテン系にとっては場違いのような雰囲気があり、取り残されたような気持ちになる事が度々あった。ギャロデット大学でもいまだに人種差別が残っているのも、黒人側と白人側から視点が違っていることがこのクラスを通して現実が見えてくる。そのように議論の場を持つことによって、解決していくことも大切だとクラスを通してそう感じた。

4) LIN263 Introduction to the structure of American Sign language

2009年秋学期に受講したLIN101手話言語学入門に続いて一段と専門的に受けた言語学である。このクラスの目的は、Phological process, morphemes (形態素) など中心とした講義であり、手話をさらに分析したものである。授業中に英語とアメリカ手話を比較することが多く、時々わからない語彙が、ところどころあって、授業についていくのに大変だった。しかし、手話言語学を学ぶことによ

って、日本手話だとどの語彙に当てはまるのだろうと頭の中で比較したり、他の言語と比較することによって、日本手話の言語学理論が見えてくる。この授業を学ぶことで日本手話の定義は何だろうか、と強く感じた。ろう社会は、年代、地域、家族背景、教育背景が異なったり者が集まってくる。自然ながらも手話の表現方法が当然違って来る。例えばろう学校に通っていたろう者が日本手話より日本語が得意という人がいれば、メインストリームに通っているろう者は日本語より日本手話が自分の思ったことが言えるというように一人ひとりが持っている言語力によって手話の表現が現れているのではないかとそう思う。しかし、現実では一部のろう者同士が日本手話を批判したりすることが度々あるのだが、これは手話言語学を学んだ上で批評しているかどうかの疑問が残る。本来手話を批評するのではなく、教えることによって将来のろう子供に今もっている日本手話を伝承することが最優先ではないだろうか。手話言語学のレポートに逸れてしまったのだが、言語学を学ぶことによって日本手話のあり方について考えることが多かった。